

アメリカザリガニの繁殖抑制をめざして

ー連続捕獲装置・しばづけ（人工藻）・小型定置網・巣穴堀りー

シナイモツゴ郷の会

長谷川政智・久保田龍二・高橋清孝

現在、アメリカザリガニの駆除活動が各地で行われているが、高密度となったため池で捕獲による低密度化や完全駆除の成功報告事例は少ない。駆除方法には、アナゴカゴなどトラップの中に餌を入れて捕獲する方法が一般に行われている。高密度のため池で誘引餌を用いたアナゴカゴによる捕獲法では、大きな個体が優先して捕獲され、駆除圧力を高くし大型個体を減少させた後で小型個体が捕獲された。アメリカザリガニの増殖力は極めて強勢であるため、個体数を減少させるには増殖個体数を上回る個

体数を捕獲する必要がある。獲り残し個体が繁殖すれば翌年には再び多くの個体が出現するので、獲り残しが多いほど増殖個体も多くなり個体数の減少を実現することが困難となる。

伊豆沼で行われているブラックバスの駆除では、砂利や障害物のある浅場で産卵する習性を利用し、人工産卵床を使って卵の段階で駆除している。孵化稚魚は浮上した稚魚の群れをさで網をつかってすくい採る。成長した大きな個体は定置網や電気ショッカーを使って駆除する。伊豆沼では、生活史のさまざまな段階の個体を駆除することでブラックバスを減少させている。アメリカザリガニの駆除においても、卵、稚ザリガニ、小型個体（幼体）、大型幼



図1 連続捕獲装置（2017年）



図2 しばづけによる捕獲



図3 さで網による捕獲

体・成体の各成長段階で駆除を行うことが必要と考えられる。大型の幼体や成体は餌の誘引による捕獲方法により駆除できる。特に連続捕獲装置は少人数、少労力で多数の大型個体を捕獲できるため効率的に駆除ができる（図1）。また、2016年5月から11月に実施したしばづけ（図2）とさで網を用いたすくい採り（図3）で同時に捕獲する方法では小型個体の割合が8割以上を占めた。同時期の連続捕獲装置での捕獲で小型個体の割合が2割以下であったことから、しばづけとすくい採りが小型個体の捕獲に有効であることが分かった。



図4 しばづけ用人工藻

個体数を減少させるためには、増殖する個体数を上回る個体数を捕獲し、いかに獲り残しを少なくする必要がある。連続捕獲装置で大型個体を捕獲しつつしばづけで小型個体を捕獲することにより今まで以上に駆除圧力を高くできると考えられる。当会は、これまでしばづけの材料としてスギなど天然枝葉を使用していたが、入手を容易し耐久性を高めるため、ノリ養殖網を使って人工藻を開発した（図4）。



図5 アメリカザリガニ捕獲用として作成したプラスチック製小型定置網

しかし、これで万全とは言えない。アメリカザリガニは移動能力も高く近くの生息場所から侵入してくる個体も考えなくてはならない。特に春と秋には稚ザリガニを抱いた雌個体の侵入が多かった。これらの個体が侵入すれば速やかに個体数が回復するであろう。郷の会では水路に小型定置網を設置し侵入個体の阻止と捕獲を行っている。定置網は耐久性を高めるため全てプラスチックのネットやコンテナを利用して作成した（図5）。

また、8月になると岸辺の陸地に巣穴が目立ち始め、9月には抱卵した個体が入っていた。繁殖時期に巣穴に入った個体は、連続捕獲装置やしばづけ、定置網などでは捕獲することはできない。今回、巣穴が集中し



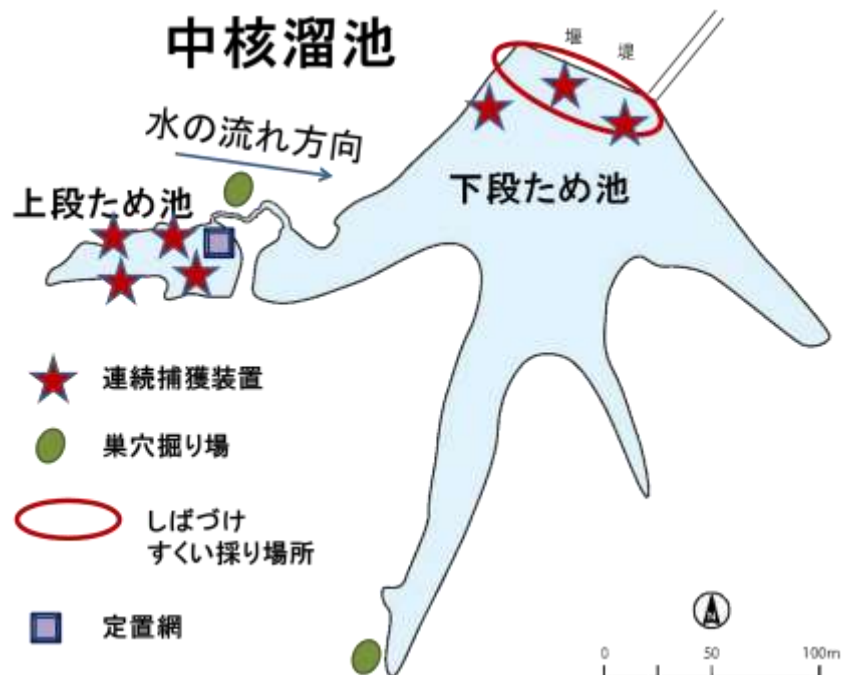
図6 巣穴堀りによる捕獲

ている場所を見
つけ巣穴に素手
を入れて中の個
体を捕獲した（図
6）。約 100 個体の
雌を捕獲し、その
内抱卵個体は平
均 200 個の卵を抱
えていた。これら
が駆除されなか
った場合は、個体
数は容易に回復
すると考えられ
る。

中核溜池では

現在、生活史のさまざまな段階の駆除を行っている。巣穴掘りによる雌雄ペア個体の捕獲、抱卵雌個体の捕獲、定置網による移動個体と抱稚親ザリの捕獲、しばづけやすくい採りによる小型個体の捕獲、連続捕獲装置になどによる大型の幼体や成体の捕獲の 5 つの方法で駆除圧を高めている。この結果、昨年、多数の巣穴を確認していた試験池の一つでは、今年はこれまでに 5 個の巣穴が確認できただけである。また、試験池で行ったしばづけやすくい採りでは 2016 年と 2017 年の捕獲数が月平均で 9 月まではほぼ同じであったが、2017 年 10 月は捕獲数が減少した。10 月は新規参入個体が大部分を占めるため 2017 年はそれらの個体が減少した結果と考えられる。

アメリカザリガニの捕獲にはマンパワーの確保が必要であり、今後、さらに捕獲の効果と省力化を図る必要がある。



しばづけとさで網によるすくい採りでの捕獲数

